

presented by MIBURI

R18 for adult only

presented by MIBURI

R18 for adult only

presented by MIBURI

美
武
里
の
本

R18 for adult only

presented by MIBURI

美武里の本 5

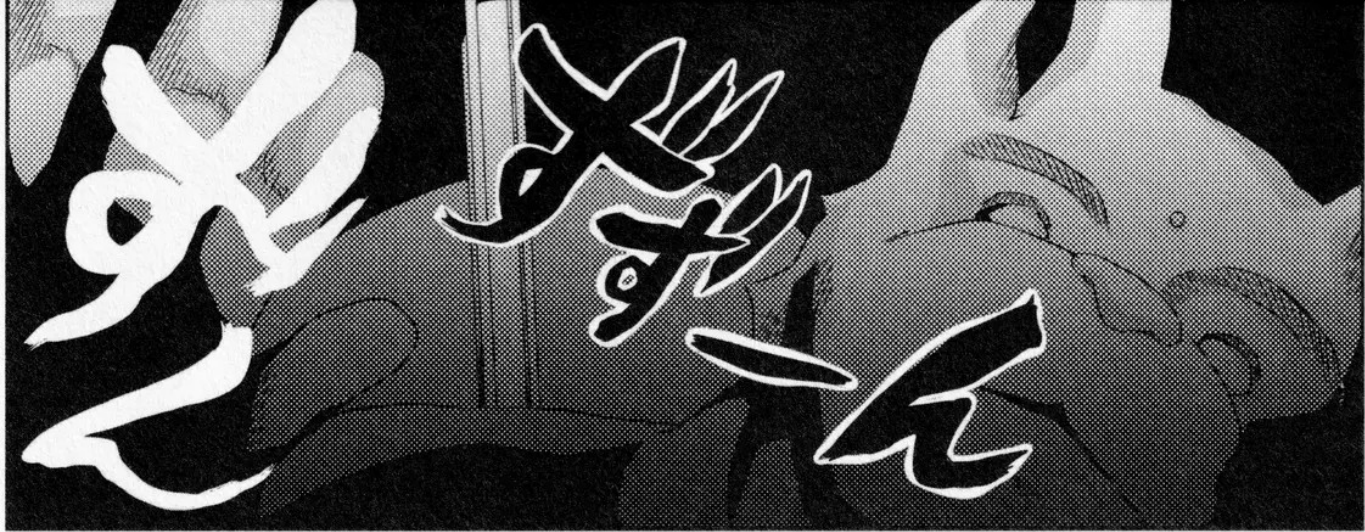
■ contents ■

美雅 5 ~ 27

竹まねこ 28 ~ 33

風雷雨シロ 34 ~ 45

和泉美和 46 ~ 61



どうか
どうか

どーか
お願いしま
す!!



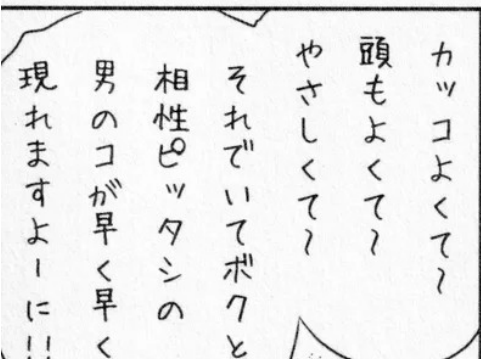
残り少なくなった
学園生活…
平々凡々な日常しか
送ってこれなかった
この善良純情少年に

ラガラハウハウハの
エンジヨイライフを
過す最後の
チャンスを与えて
やってくださいませ!!



バーカ
そんな邪な願い
大仏様だつてきく
わけねーだろ
拍手は神社だ

うるせー
何事もやって
みなきゃおかんねえ
モンなんだよ!



カッコよくて
頭もよくて
やさしくて
それでいてボクと
相性ピッタシの
男のコが早く早く
現れますよー!!



不信心なヤツらに
キツイお仕置き
を与えたまえ



やっほしとは
なによあ〜

ニーいうコトに
付き合うバカは
ユキぐらいしか
いねーだろ〜が



やっほし
おまえかよ〜

親友というと
聞こえはいいが
実際のところは
いわゆる「腐れ縁」
ってヤツだ



持つべきものは
親友じゃない！
カケルの方こそ
感謝してよね



くしゅんッ



たまたま昔から
一緒にいた時間が
長いつつだけの
同級生なワケで〜

は〜



ほくらみる!
欲かいた
願いなんぞ
するからバチが
あたるんだよ

なにそれ?!
少しは気のきいた
優しい言葉の
ひとつでも
かけてくれたって
いいんじゃないの!?

見ないフリ
見ないフリ
見ないフリ



Happy
修学旅行
Presented by 美雅

しかもコイツミ

こんなナリを
してるけどミ
男だ!!
同級生にはヒミツにしてるけど



えっ
っ

修学旅行

ユキちゃん
きてくれね
のオ!!?



みんなに風邪
うつすと思っ
からってサ!



いミいや
そーいうコト
じゃなくてサッ

カミカケルも
そんなコト思っ
ないよな? な?



マジかよオ
せっかくの告白
暴露パーティー
だったのに?

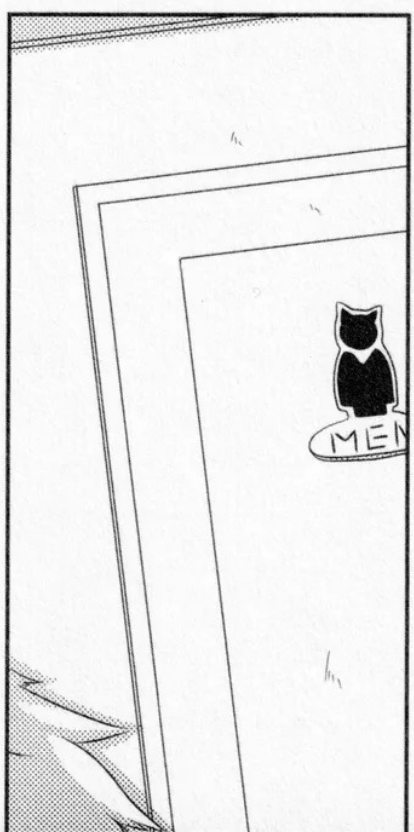
なんだデメエ?
わたしだけじゃ
不満ってか!?



わりイ

ちよっくら
トイレ

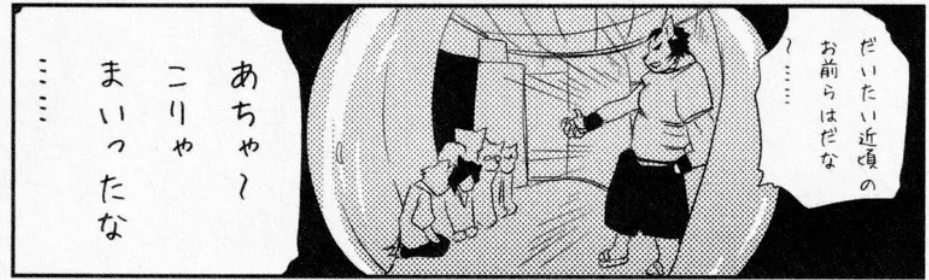
キミ、キマッ
敵前逃亡は
重罪だぞっ!





誰がこんな
ところで
パーティー開け
言うたんじゃ?

あぁ!?



だいたい近頃の
お前らはだま
く……

あちゃ〜
こりゃ
まいったな
……



ヒゲの説教は
確実に一時間は
おわらん……

つまりオレも当分
部屋には戻れねえ
ってコトか



仕方ないよ
とりあえずココに
隠れてれば
いいんじゃない?

どっちにしろ
部屋みんなも
捕まっちゃって
るし

そーするしか
ねーか……



ぬあ!?

コミコレは

ーッ!!!



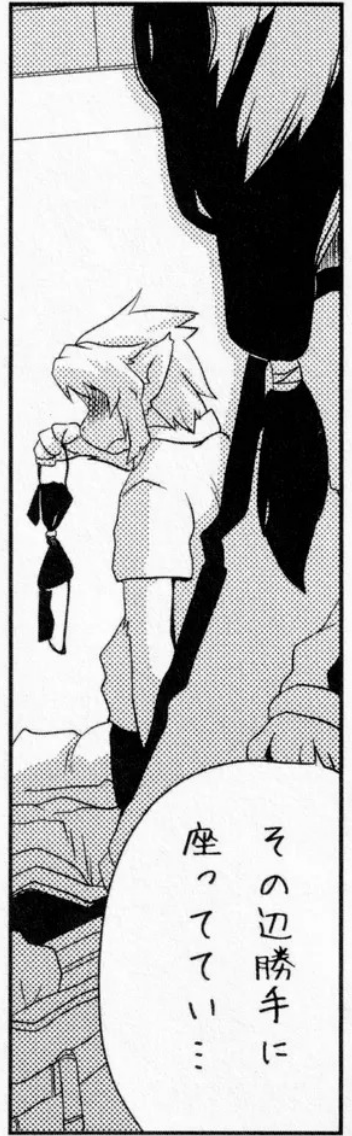
……ん?



あゝゝ

ゝゝゝ

ヤダヤダヤダ
ごめんごめん
ごめんごめん



その辺勝手に
座っててい...



ガミ
ガラしてると
いまちよっと
苦しくてミサ!

てゆーかあ
色気無さすぎだよ
なーいうのミ
ミミ エへへ!



カケルはサミ
昔から変わらないね
いつもボクのこと
気にかけてくれてる



なミミ
何言ってるんだよ
男が色気も
なにもミミ...

そミそっか!
そう言われれば
そうだよねミ
あはははは



それよりもミ
もっと気を付けとけよ
男ってバレたら
何言われるか
わかんねえからな



小学校4年のとき、ボクが初めて女の子の格好して登校したときも

何も言わずに受け入れてくれた…



ナ… ナ… ナあ？

そうだ！



いじめられそうになってもいつも守ってくれて…

中学入ってからもいつも気にかけてくれてたよね？



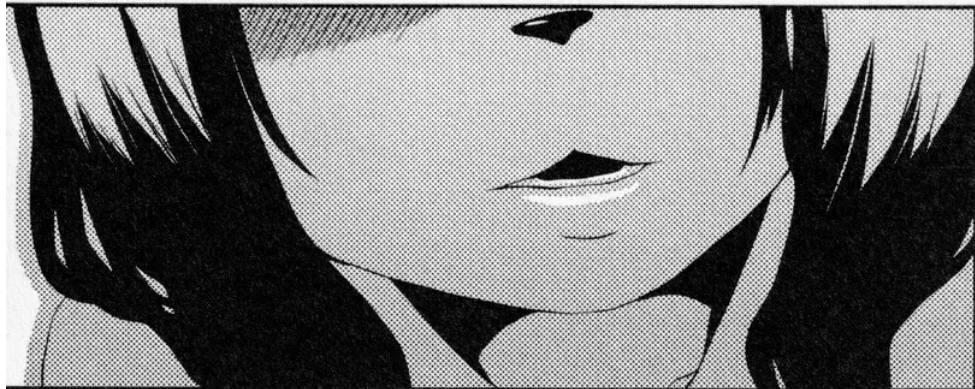
ちよつとキスしてみよっか！

はあ!?



お…おまえマジに熱出過ぎなんじゃねーの!?

だ…だいたいなんでいきなりそんなコトをだ…







ホミポクは
いいよ……
……その

カケルが
そういうコト
したい……なら



ギン
ギン
ギン

はうッ!!



バミバカ
いえよっ!!

みんなだっ
このすぐ外に
居んだぞッ!?

はじめ
なんだ……



はじめでこんな
勇気させたのに
フツの友達なんて
戻りたくない……

戻りたくないよ
……カケルう





そんなじっくり見ないでよ
胸とか無いから

「……」めんね
本物の女の子
じゃなくて……



いや……
コキは十分
か……可愛いし
胸もなんか
柔らかい……



あっ!!
「めんめん」
「めん!!」

「……」
こーいうのって
慣れてなくてっ



や……やあ
ちよっ……痛っ



カケルは
「初めて?」
や……やっば
下手クソ
だった……?

「……」
「ううん」

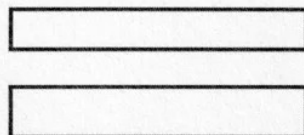
ポクも初めては
一番大好きな人に
あげたかったから……



だから初めてが
カケルで
本当によかったな
………って



ユキ……



……ポクのも
脱がして
いいよ



えっと…
こっこに入れる
んだよな…

うん…
ボクには
そっしか
ないから…





とうとう
越え
ちゃったね

ミ友達の
ライン……



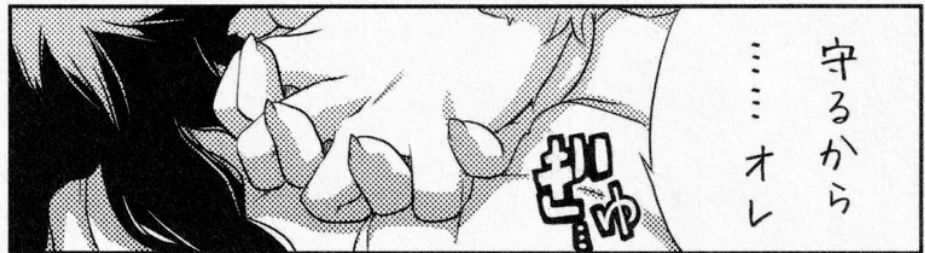
だって
ユキのこと
好きなんだって
もう隠さないで
よくなったから



ボクも……
カケルのこと
大好きだよ

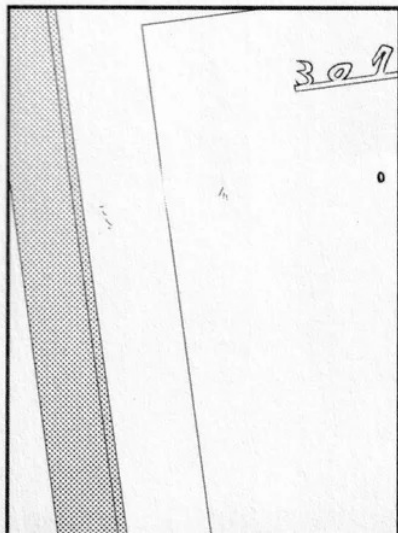


後悔してないよ
……オレ……









いいから早く
はなれて隠れろ
っつーの!!

大丈夫!
コレなら
なんとかバレ
ないっしょ!?

モッ
モッ
ゴッ
ゴッ
モッ

ミいや だから
肝心な部分が
隠れてないしミ

ゴッ
ゴッ
ビッ
ビッ



まあ
バレたらバレたで
考えればいっか

ビッ
ビッ



最終日ロケ

8:15	やまねこホテル	発
8:55	栗山おみやげ店	着
	京都駅	着 各班点呼確認

あゝあゝ
とうとう
修学旅行も
終りかあゝ



にや……
あんにやろ?

お荷物扱い
しやがってエ?



……なのに
お前らは最後まで
世話ねーよなマ



まっ終点まで
仲良く
おねんねして
くださいな



いいじゃない
ニーいう
修学旅行もさ



ん……まあ
悪くない
かもな……

おわり

あとがき

はじめまして&こんにちは、この度はこの本を手にとって頂き
ありがとうございます！

男の娘が流行っているようなので、流れに乗ろうと試行錯誤
してみましたが、こんな有様でした！

男の娘はブラをするのかどうか悩んでたところ、ツイッターで
意見をくださった皆様ありがとうございます。

ブラはしてない方がいいという
意見が多かったけど、結局
女装子さんに「ブラはあたりまえ」
って言われて描いてしまいました。

昔の甘酸っぱい黒歴史でも
思い出しながら読んで頂けると
幸いです。

それではまた機会がありましたら
よろしくお願いします。

今回も快くゲストを引き受けて
くださったやまね子様、
いつもお世話になってるシロ様
ありがとうございました！

最近は男の娘とあわせて女装子も
いいなと思い始めました！重症です！



何の変哲もない自分。

普通の街。



そこで今俺は
至極普通に待ち合わせ。



お待たせしました

電車おくれて...

あ



傍から見たら

こいつとは普通に付き合っていて

一緒にいると二日があつた感じが
過ぎている。



——まあ、少し
変わっているよすれば

こいつが少し性欲が強い
よさるんやん。



HOTEL

休憩

通常 1,500円より

深夜 2,000円より

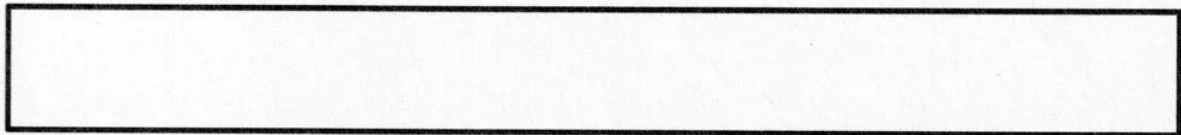


——オトコ
のこころだよ。

ちゅ

ずんずん





——ツツツツ
夜は長い。

.....
ツツ

.....ツツツツツ
ツツツツツツツツ
ツツ

あ、あの



あとがき

こんにちはorはじめまして。
やまねこと申します。

またしてもゲストとしてお誘い頂きまして、
再びの登場となりました。
お誘いありがとうございます！

美雅様より

「男の娘ネタだと嬉しいです！」と頂いたのもあり、
男の娘というのを初めて描いたじゃないでしょうか。
うーむ、表現がやっぱり難しいですね！

ともあれ、ここまで読んで頂き幸いです。

またどこかで！

やまねこ

1

母なる大地に、陽の光が燦々と降り注ぐ。

その陽射は、赤茶けた大地をキラキラと照らし、地表や大気から、水分すらも奪っていた。

そんな、大地を縦横に切り裂く溪谷の頂上に一人の少年が立っていた。

その黒豹の少年は、腰みのに頭には羽飾りだけの軽装で、無駄なく鍛えられた、豹の名に恥じぬ肉体に、ワシのような眼光を秘めていた。

そして、その手には体の倍ほどもあろう大槍を持っている。

少年は、片足を岩に乗せてスンスンと鼻を鳴らす。

羽飾りに半分隠れた耳も、心なしかそれに合わせてピクピクと動いている。

「もう、雨季か。季節がめぐるのは早いな。よく見れば、水牛も戻ってきたじゃないか」

少年は、おでこに手を当てて、遠くを見ながら独り言をつぶやいた。

そう、サバンナには雨季が戻ってきた。

「それにもう、最初の雨じゃないか」

黒豹の少年が尻尾をユラユラと揺らしながら、呟いたその

先には、大きな雨雲が立ち込めている。

少年は、踵を返し、溪谷を降りていく。

その軽やかな走りは、まさに黒豹のごとし。尻尾でバランスを取りながら、どんどん高度を落としていく。手に持つ大槍も、物ともしないし、むしろ役立っている。

溪谷を降り切った後も、少年の目的地はまだ先である。

スピードを落とすことなく、サバンナを走る少年の横を、ガゼルが嬉々として飛んで付いて来ている。

そして、キロほど走り、バオバブの木を通り過ぎると、少年の目的地の集落である。

文明から取り残されたようなところにありながらも、食料や医者運び込む為の未舗装の道路が通っているこの集落が、少年ケルロの故郷である。

集落には、土壁の家が二〇ほどあり、その周りで牛や鶏が飼われている。

ケルロが集落に戻ると、中央の広場に居た、初老の黒豹が、ケルロに話しかける。

「ケルロ、大地とは対話できたかの？」

「はい、村長。雨季になりました。最初の雨が降ります。水牛たちも戻って来ました」

「ほうほう、確かに雲行きが怪しいの。ご苦労。食事を取りなさい、主は痩せすぎじゃ」

「はい、村長。」

短い会話を終えるとケルロは、大槍を置き自分の家と思しき家に入ってしまった。

2

「お兄ちゃん！おかえりー！お兄ちゃん！」

家の中には、ケルロにそっくりの幼い黒豹の少年が居た。

その少年も腰みだけのシンプルな格好で、この集落の野性的な雰囲気より一層、醸し出していた。

「ケルロ、父さんと、母さんは？」

「あのね、母さんはくるまっというお馬さんで、街に買い物に行ったよ。父さんは、牛を川に連れってった。あとこれ、お兄ちゃんのご飯だって」

そう言うと、ケルロと呼ばれた少年は、ゴロゴロと転がりながら、銀色の皿を押しよこす。

そこには、玉蜀黍の粉で作った餅とトマトスープが添えられていた。

トマトスープはケルロの大好物である。

食事はすぐになくなった。

成長期のケルロにとって、大盛りの餅もスープも大した量ではないのだ。

「ケルロ、おやつ食べに行くか？」

ケルロは意味深な言葉をケルロに放ち、微笑んだ。

「え？おやつ？！食べに行く！食べに行く！」

「うん、ついておいで。」

そう言うとケルロは、ケルロの手を引いて、家を出る。そして、ケルロは大槍を片手に持つと、テクテクとケルロと歩み出す。

村から出ると、歩を進めると、次第に動物が多くなり、大型肉食獣も見かけられるようになった。

しかし、ケルロの槍の腕前は、同世代の黒豹より、抜きん出ている。並の動物なら、肉食だろうと草食だろうと、物ともしないだろう。

「ねえねえ、お兄ちゃん、なんであのヒョウさんは木に登れるのに、ケルロは登れないの？」

無口で歩いていた、ケルロに急に質問され、ケルロは驚いたが、ケルロも正直に答えた。

「ケルロ、それはね、あの豹さんには鋭い爪があるからなんだよ」

「ふーん、ケルロも爪欲しいなあ」

ケルロは、手をグーパーしながら、手を眺めていた。

そんな、微笑ましい会話をしているうちに、ケルロとケルロは目的地のオアシスに着いた。

「ケルロ、ほら。その草むらからオアシスの中を覗いてご覧」

ガサゴソと草むらの中を進んでいく、ケルロ。

「うわー！！！！お兄ちゃん！すごいよ！果物がいっぱい！」

ケルロは、今まで誰にも教えたことなかった、果物が多いこのオアシスに『おやつ』を食べによく来ているのだった。

ケロルは、ケロルの後について、オアシスに入ってしまった。
「どうだ、ケロルス、いいだろ？」

「うん、ココナッツにあとアレとかコレとか名前わかんないけど、美味しそう！」

ケロルは近くの椰子の木を蹴り、ココナッツを落とす。

落ちた拍子に割れたココナッツからは、透明な美味しそうなココナッツミルクが滴っている。

「ケロル、マンゴーとバナナを取ってくるから待つてろよ」

そう言うのと、ケロルは、マンゴーの木にジャンプし、マンゴーを二つ三つ取り、ケロルに投げてやる。

そして、バナナの木に器用に登ると、黄色く熟したバナナを一房取ってきた。

「ケロル、バナナもマンゴーも種があるから気をつけるよ？」
言うてみたものの、ケロルは既にバナナもマンゴーもムシヤムシヤと食べていた。

自分もと、ケロルもココナッツを飲み、フルーツを食べ始めた。

3

もう夕方になっただろうか、集落に戻ってくると、雨がポツリポツリと降り始めた。

ケロルは、ケロルを家に返すと、気がかりなことがあったので、村長を尋ねることにした。

「ケロル、待つておったぞ。何処に行つておったのだ？」

「オアシスに弟と行っていました」

「そうか、そうか、ならばよろしい。そろそろケロルも、儀式

の時が迫つてきておつてな、その事で、主に話があったのじゃよ」

意味深に語る村長に、ケロルも複雑な顔をしている。

「村長、儀式のことなんです、やはり俺が、やらなければならぬんでしょうか？」

「さよう、主が一番の近親者じゃからのお、それに、主は何はともあれ、好きものじゃからな。ほほほほ」

村長は、そう言うのとニヤリと笑みを浮かべた。

この村には、代々特殊な伝統がある。

男児が一定の年齢に達したと、村長が判断した場合に、その男児は雨季の晩に近親者の男児が筆おろしをしなくては

いけないという伝統である。

今年ケロルの番だった。

そして、ケロルが一番の近親者である。

ケロルは、村で今までに何度か男性と性交をしており、ケロルの筆おろしも、容易いものかと思われた。しかし、ケロルはケロルにとって弟である。

ケロルはそのことに抵抗があった。

ケロルはボーッと歩きながら、家についた。

「お兄ちゃんおかえり！そんちようさんなんだって？」

「ケロル、あのな、ケロル、お前もそろそろ大人になってきただろ？、それで大人になる儀式のためのお話だったんだよ」

「え？！僕、お祭りの夜のぎしきに出られるの？」

「ああ。出られるも何も、今年の祭りはお前が主役さ」

嬉しそうに、耳をピクピクと動かすクロル。
こんな可愛い弟と幸か不幸か、体を繋げなければなら
ないのだ。

日が沈みかけている。まだ両親は帰ってきていない。
早い、ケロルはクロルを寝かせることにした。

「クロル、少し早いけど寝なさい」

「えーお兄ちゃん、まだ起きてたいよお」

「ダメ、大きくならないぞ」

ケロルには秘策があった。

4

両親も帰宅し、村一体が寝静まった、丑三つ時。

ケロルは、まだ寝ていなかった。正確には寝たふりをして
いた。

ケロルはスヤスヤと穏やかな寝息を立てるクロルに近づき、
首筋の匂いをクンクンと嗅ぐ。

まだ幼い少年らしい、土と太陽の香りがした。

これから、この幼い少年に、悪いイタズラをしようとするの
は、えらく気が引ける。

しかし、ケロルはクロルにこうして夜這いをしないと、祭り
の当日に儀式を行えそうになかったのだ。

手始めに、まず首を舐め上げる。

「ん、あっ、ん」

クロルが一度寝付くと絶対に起きないことを、ケロルは知っ
ていた。

レロレロと、首の筋を舌先で確かめるように愛撫する。

ケロルは、こう見えてもかなりのテクニシャンでこういったこ
とには年齢の割には長けている方であった。

ケロルは首筋から、舌を這わせながら下がっていき、クロル
の乳首を啄む。

幼い弟に対して行う不貞行為ではあったが、その背徳的な
行為がケロルをより一層興奮させている。ケロルは、体が熱
くなるのを感じた。

弟の幼い体に欲情しているのであった。

「クロル、可愛い……」

脇を舐めながら、そのかぐわしい少年の匂いに絆されなが
ら、ケロルは呟いた。

レロレロと唾液の続く限り、その幼い四肢に舌を這わせ、い
よいよケロルは、クロルの腰布に手をかけ、一気に腰布を外
した。

そこには、まだ幼いペニスが存在無きげにぶら下がっていた
が、ボルテージが上がったケロルはそのペニスをゆっくり口に
含む。幼いペニスからは相応しい僅かな臭いがあったが、ケ
ロルには気にならなかった。

小さいながらも、同じ年代からしてみればやや大振りなそ
のペニスを慣れた舌使いで愛撫するケロル。程なくして、ペニ
スは頭をもたげ、成長し始める。

ケロルは舐めるように美味しそうにそのペニスに舌を

這わせる。

先端を剥き、舌で啄いたり、根元から先端に向けて舌を這わせたり、口に咥えて甘噛みしたりを繰り返した。その間中、ケロルは喘ぎ続けるも、起きることはなかった。ケロルは、起こさないように気を使いつつも、なるべく情熱的にケロルを煽るように。ペニスをしゃぶりつくす。

「んあっあっ」

まるで起きている時の反応のような喘ぎ声に、ケロルもその淫乱な自身のペニスを扱きながら、行為を続ける。その時だった。

ケロルの体が、ビクリと痙攣し。ペニスが戦慄く。

射精かとも見て取れたが、まだ精通していないケロルは、ドライオルガズムを迎えただけだった。

この家で最も文明的な時計は、月明かりに照らされて、行為の開始から一時間も時間が過ぎたことをケロルに知らせていた。

ケロルは、口の周りの唾液を月明かりに光らせ、ケロルのペニスから口を離すと、自分のペニスを治めることにした。

唾液を手に取り、潤滑を良くすると、根本から一気に扱き上げる。

快感に体を震わせながら、弟の痴態や過去に行われた淫行を思い出し、一心不乱に自身を慰める。

「あっ！んっ！そんちょ！ケロル！あっ！」

「やべ、はんばない、きもちっ！」

手はどんどんその速度を速めて行き、最後に体全身が震え

ペニスが脈打つ。

体液が飛び散る。

一瞬の出来事だが、ケロルは確かな快感を感じていた。

「ハアハア。ハアハア」

床に飛び散った体液を指にとり、舐める。

「甘…い」

自分は、なんて淫らな生き物だろう、そんなことは今までに何度も思ったが、今日は特にその思いが強くなった。

この日は、手早く後片付けを済ませ、翌朝の牛の世話のために床につくことにした。

ケロルは、夢の中ですごく幸せだった。

何の柵もない、夢の中の世界。

好きなものだけが存在し、傷つけるものがないこの世界をケロルは愛した。

夜は、まだ明けない。

5

ケロルは、その朝遅く起きた。

結局、牛の世話には行けなかった。

「おにいちゃん！朝だよ！起きて！」

ケロルのクリクリした瞳に見つめられて、一瞬ケロルはドキッとした。

「ケロル、おはよう。よく眠れた？」

「うん、よく眠れたけどね、ケロル変な夢見たんだ。」

一瞬ケロルはドキッとすする。

「あのね、お兄ちゃんがぼくのおちんちん舐めてるの」

まさか、昨日の淫行を言い当てられるとは思わなかった。

「ケロル、そ・それは夢だよ」

「変な夢見るんだね！」

「ああ、夢っていうのは変なものだからな」

なんとか、窮地を切り抜けたケロルであった。

この日も、熱い日だった。

太陽に焦がされた大地は、黒い毛皮のケロルを容赦なく熱する。

ケロルは午後に水浴びに行く事にした。

水場にはケロルの他にも村の大人たちが集まっており、みんな水浴びに精を出している。

ケロルも、腰みのを外すと水に体を沈め、涼を取る。

ふと、ケロルは周りを見渡すと、そこに来ている大人たちの裸が気になってしまった。

黒豹の集落ということもあり、見る人見る人、全員が靱やかな肉体である。

自分の筋肉をより艶やかに見せるボディペイントをした大人。

見れば見るほど、ケロルの脳内は、色事で満たされていく。ケロルはこれ以上、水場に居たら、余計に体が熱ってしまう

と思ひ、水場を後にした。

ケロルは、その後、いつも通りの大盛りの食事を終えると、今日の雑事を終えた。

そして、夜。

再びケロルは弟に夜這いをする事にした。

スヤスヤと眠る、ケロル。

ケロルは今日は水浴びに行かなかったもので、ほのかに汗の匂いがする。

それがケロルをより一層興奮させていた。

まず、ケロルは寝ているケロルの横に横たわり、首筋に顔をうずめて、弟の汗の臭いを嗅ぐ。

胸いっぱい弟の臭いを吸い込んで、少しトリップしたような気分になり、今度は匂いを嗅いだところに舌を這わせる。

少し、しよっぱいかったが、ケロルは続けて弟を愛撫する。

胸に手を這わせ、乳首を刺激しながら首筋を舐め上げる。「んっ！あっ！おにいちゃん……」

ケロルは、一瞬ビクリとしたが、ケロルは起きていない。

ケロルはその事を確認すると、再び舌を這わせ始める。そして、ケロルはケロルの腰みの中に手を入れ、まだやわらかいペニスをゆるゆると扱く。

しばらく扱くと、ケロルの幼いそれは硬さを持ち始め、すぐに大きくなった。

次に、ケロルはケロルの腰みの中に頭を入れ、ペニスに舌を這わせる。

そこから、少年らしい臭いが漂う。

ケロルは顔を上気させながらも、行為を続ける。

舌を使い、ケロルはケロルを攻める。前日と同じように、ペニスを剥き舌を這わせ、先端を吸う。

ケロルは、弟のペンヌだということも忘れて、味わい尽くす。「ほっほっほ、主はやっぱり好きものじゃったか…」その時、声が響いた。

後ろを振り返るとそこには村長が立っていた。

「そ、村長!?! こんな時間に何を?!」

驚きすぎて、変な声を出してしまった。

「ケロル、お前と弟の儀式の日取りを知らせに来たのじゃ」

「た、確かにそろそろですけど、まだ3回雨が振ってません!」

「まあ、そういうと思ったんじゃが、ケロルは早いほうがいいかと思っとな、早速明日、儀式をとり行うことにしたからのおくよろしくなあ」

そう言うと、アングリ口を開けて驚きを隠せないケロルをよそに、村長は行ってしまった。

その日は、弟への奉仕もそこそこにケロルは眠りについた。

6

祭りの日、朝早くにケロルは大人たちの声で目を覚ました。やいのやいのと家の外から、声が聞こえる。

祭りの準備をしているのいだろう。

ケロルは、うちの外に出ると裏手に回り、汲んである水で軽く顔を洗い、ヒゲを整えた。

街の中央広場では、村長の一声で、櫓や灯籠が組み立てられている。

傍では、祭り装束の大人たちが、ボディーパーペイントを入れて

いた。

ケロルは、家の土壁に背中を預け、時間を過すことにした。

大人たちの中には、自家製の酒で酔いが回っているものも居る。

「おにいちゃん、おはよう」

眠たそうな目をこすって、家からケロルが出てきた。

本当に眠たいようで、所在無さげに揺れる尻尾もフラフラとした軌道を描いている。

「ケロル、起きたのかい。まだ寝ていても良かったのに」

「うん、おにいちゃん。なんか外が騒がしくって」

ケロルは、ケロルの頭を撫でてやり、隣に座るように促す。

「おにいちゃん、今日はお祭りなの? ケロル、毎年お祭りの日わからなくて」

「お祭りはね、村長さんが決めるんだよ。今夜はケロルの為のお祭りって言っただろ?」

ケロルは、キョトンとしたような顔をしながらもケロルを見返す。

「わーい!!! ケロルが主役?!?!」

顔がパツと明るくなり、寝ぼけた顔に生気が戻ってきた。

「でも、毎年お祭りは最後まで見たことないからケロル、なにしているかわかんない」

この村では、毎年行われるその特殊な儀式のために、年少者は早々寝かしつけられていた。

ケロルは、いよいよケロルに説明しなければならぬと悟っ

た。

「クロール、あのねお祭りで儀式をするんだ」

ウルウルと、見上げる純朴な瞳になかなか卑猥な儀式を説明できない。

「儀式っていうのはね、クロールと俺が…その性交渉するんだ。本当は男同士でしないんだけど…」

「せーこーしょー？それっておいしいの？」

純粹無垢なその表情からその不埒な言葉の意味を理解しているとは思えずに、ケロールは言葉を続ける。

「あのね、クロール。おちんちんについてるでしょ？それを女性の性器に入れるのが性交渉っていうんだけどね、それを今日は、お兄ちゃんのお尻で再現する儀式なんだよ」

クロールは唾然とした表情をしたが、ケロールは更に言葉を続けた。

「痛くないし、逆に気持ちいいんだけど、最初はちよっと緊張するかな…」

「クロール、お兄ちゃんとせーこーしょーしたい！」

そして帰ってきたのは、意外な回答だった。

クロールは、尻尾をフリフリと振って、兄との性交渉に同意し

たのだった。

「そ…そっか、クロールが嫌じゃなきゃいいんだ」

ケロールは頭の後ろをポリポリと掻きながら、いいんだ、ともう一度言った。

「クロール、お腹すいたからこ飯食べてくるね！」

そう言うと、クロールは走り去り、微妙な気持ちのケロールが残された。

「さてと、手伝いするか…」

7

夜、祭りの太鼓の音が響き、焚き火がパチパチと音を立てて、村の中央で焚かれている。

大人たちは酒を飲み交わし、子供たちはわいわいとはしゃいでいる。

村長の隣の席に、クロールは座っていた。

普段は付けることのない羽飾りをつけ、ボディーパーペイントを施している。

ケロールの姿は見えない。

「皆の者！聞くのじゃー！」

「今宵はエデルの息子クロールの元服の義じゃー！」

わーわーと歓声が上がリ、太鼓が打ち鳴らされる。

「そして、元服の義はこれから兄のケロールによって執り行われるー！」

クロルが嬉しそうに笑う。

「皆の者、子供は寝かしつけるのじゃ！」

「バタリと音がやみ、子供が家に連れて行かれる。

数分の後に、大人だけが目を血走らせているという、異様な空気に包まれた。

「ケロル、入られよ」

フツと、視線が村長の後ろのテントに移る。

すると、中から綺麗な中性的な衣装を着たケロルが出てくる。

顔は、上気し息は荒い。

この村の伝統で、おそらく香や媚薬の影響でこうなっていることは明らかだった。

「クロル、んっ兄ちゃん、はあはあ」

村の中央の祭壇の上には毛皮の毛布がしかれていて準備は万端だった。

「さあ、ケロル、クロル、中央へ進みなさい」

村長に促され、ケロルはクロルを連れ、祭壇に上がる。

「お兄ちゃん…せーこーしーしょーするの？どうすればいいの？」

積極的なクロルの声にケロルは、クロルの唇を奪う。

「んっ！んんっ！…！」

急な接吻に手をばたつかせるクロル。

口を離すと、クロルもケロルも呼吸が荒い。

「兄ちゃん！なにをするのっ！」

「前戯…だよクロル？」

大人たちの視線が熱い。

「これもせーこーいの一部なの？」

「そうだよ、クロル。続きしよ…」

クロルは、ケロルの腰みのを取り、半ば硬くなったペニスを露わにする。

周りが、一気に沸きたち、野次が飛ぶ。

レロレロ、と見せつけるようにケロルは舌を這わせていき、ペニスまで舐めていく。

このクロルのボディーペイントは甘く、媚薬の効果がある。

「クロル、可愛いよ…クロルの全部欲しい、俺のこと脱がして」

そう言うのとクロルは両手を広げて、クロルに脱がせて欲しいといった。

そして、クロルは恐る恐るクロルのこの村には似つかわしくない綺麗な服を、脱がし始めた。

「村長、あれどうしたんですか」

村の男の一人が村長に耳打ちする。

「街の若い娘が着ている服じゃ。ケロルに似合うと思ってもらってきたのじゃよ。ほほほ」

クロルがケロルの服を全部脱がし終わると、そこにはまた艶やかなボディーペイントを施した、ケロルの肌が現れた。

ケロルのペニスは最大限に肥大化している。

「クロル、今日男になろう」

再び、ケロルはクロルに口付けをし、祭壇の上に押し倒した。ケロルは、オロオロとしているクロルのペニスを口淫し、半ば強制的に勃起させる。

「お兄ちゃん、怖いよ…」

「怖くないよ、今気持ちいだろ？」

ケロルの積極的なフェラチオはクロルを完全に勃起させ、周りの大人たちからは歓声が上がる。

「さあ！繋がれ！兄弟たち！」

村長の一声で、ケロルはクロルを押し倒したまま、上に馬乗りになり、上体を寄せると、もう媚薬を使った時点で、柔らかく解しておいたアナルに、クロルのペニスをあてがい、挿入した。

「ふっ…んっ！あっ！クロルのおちんちん、おつきくて気持ちいい」

ケロルは腰を思いっきり落とすと、えらく恍惚とし表情でいる。

「お兄ちゃん…なんだかわからないけど、あったかい…」

「クロル、それを気持ちいいと言うんだよ…っあ！」

しばらく、ケロルがクロルのペニスを味わうと、クロルに再び口付けをすると

「クロル、動くね」

と、だけ言い腰を動かし始めた。

「あっ！あっ！あっ！あっ！クロル、もっとついて！」

「お兄ちゃん、気持ちいいよ！もっと！もっと！」

二人の熱く、若い交尾を大人たちが視姦する。

クチュクチュと濡れた音を発しながら、ケロルは激しく腰を振り立てる。

「はっあはあっ！」

ケロルの、肌の大粒の汗が艶やかだ。

「クロル、突いてみて。ほらっ！おきて！腰振ってみて！」

クロルは兄に言われたように上体を起こして、突き上げる。

「あっ！もっと！突いて！あっ！」

「お兄ちゃん！なんかっ！出る！」

クロルの精通は、以外にも早く訪れた。

勢い良く、クロルは兄に種付けした。

「はあはあっ！兄ちゃん…なんか出ちゃった…」

「クロル、それでいいんだよ」

ケロルの胎内から出たクロルのイチモツについて、白い液体が、ケロルのアナルからどろりと出てきた。

「これにて、クロルを成人と認める。よかったな」

長老のその一言で、儀式に幕が閉じられた。
この二人の兄弟は、その後もこの母なる大地で、幸せに暮ら
したという。

～あとがき～

こんにちは！

風雷雨シロと申します。

はじめまして。この度は、親愛なる美武里のご本に寄稿させていただきまして、大変光栄に思っています！

今回は、黒豹ショタ兄弟で書かせていただきましたが、Pixivの方でも獣人の兄弟物ばかり書かせていただいております。自分も初めての同人なのですが、やはり小説って難しいですよ。

まだまだ拙い文章ですが、これからも見守っていただければと思います。

それでは、シロの短編を読んでいただきまして、誠にありがとうございます。

そして、親愛なる美雅様、和泉様、お邪魔いたしました。

コミックマーケット 82 風雷雨シロ

まえがき

初めましての方もそうでない方もこんにちは、和泉美和です。
ページ構成の都合上、こんなところでの挨拶です。

まず、ゲストを快く(?) 引き受けてくださった
やまね様、風雷雨シロ様 本当にありがとうございます。
緑陽社様、いつもいつもありがとうございます。
最後にこんな作品を手にとった皆様へ感謝。

以下駄文。

いくら言葉を重ねても伝わらないものもあります。

でも、本当にもう言葉もないくらいに言葉を使い尽くしたのかと問われると
そんなことはないように思うのです。

喋りが苦手だと、あとからああ言えばよかった、こう言えばよかったばかりです。
言わないで後悔するより言って後悔しろと誰かがいってましたが
難しいものですね。

でも言葉は万能ではないですし、どうにかこうにか
うまく使いこなせればと思う今日この頃です。

2012年8月某日

和泉美和

CARL

~断章Ⅲ~

presented by 和泉美和





おははは

ちやちや

おは

おは

おは

おは

おは

おははは

んん

ちや

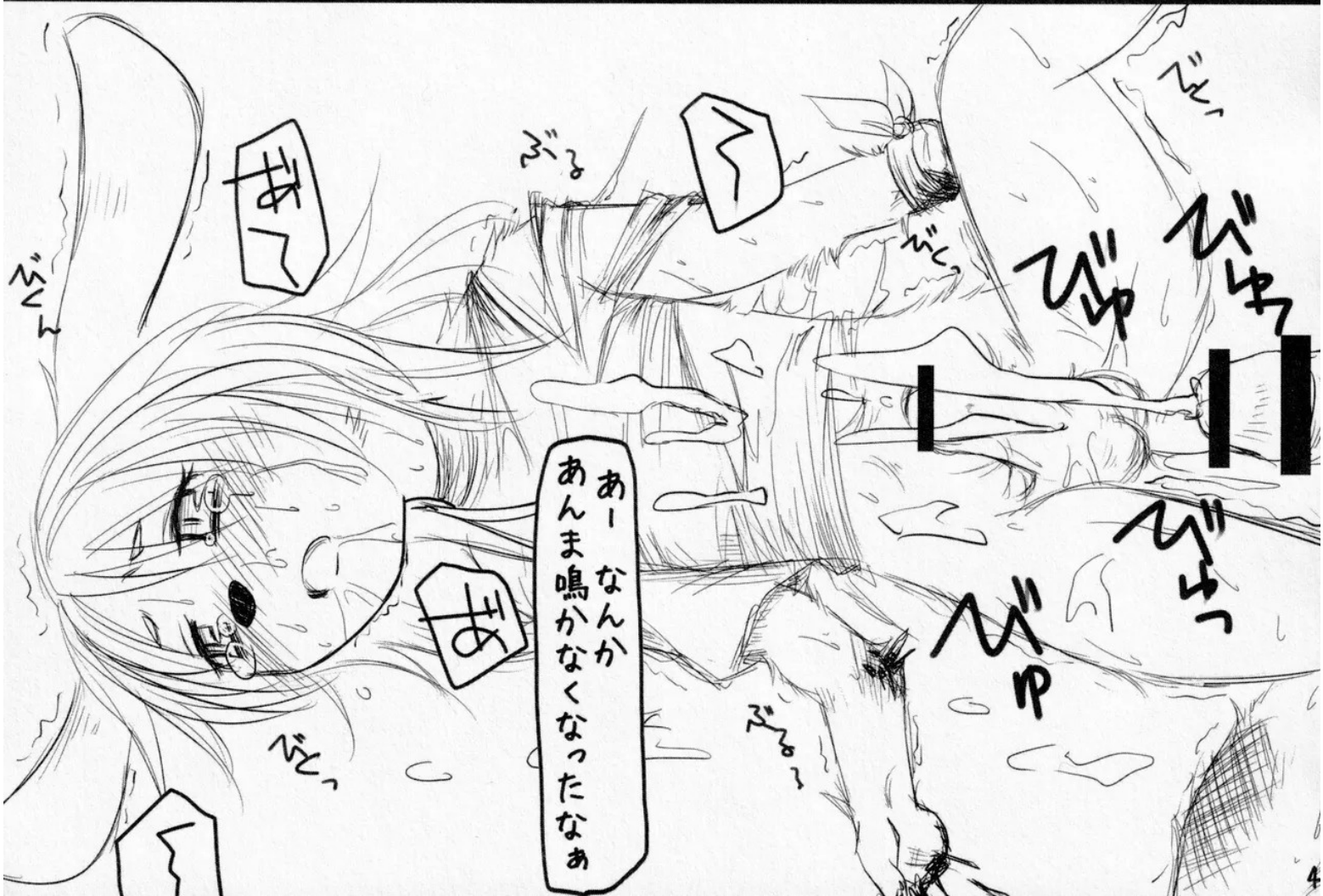
おは

おは

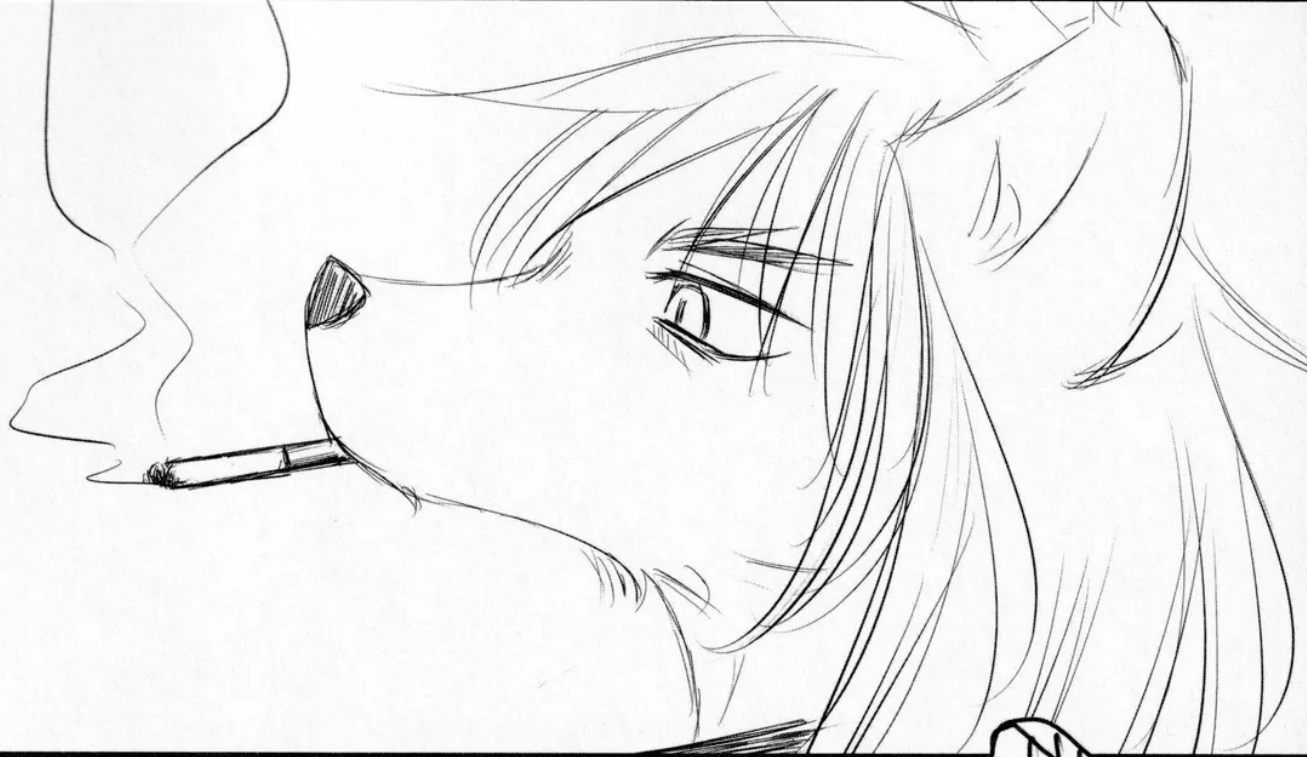
んん

おは

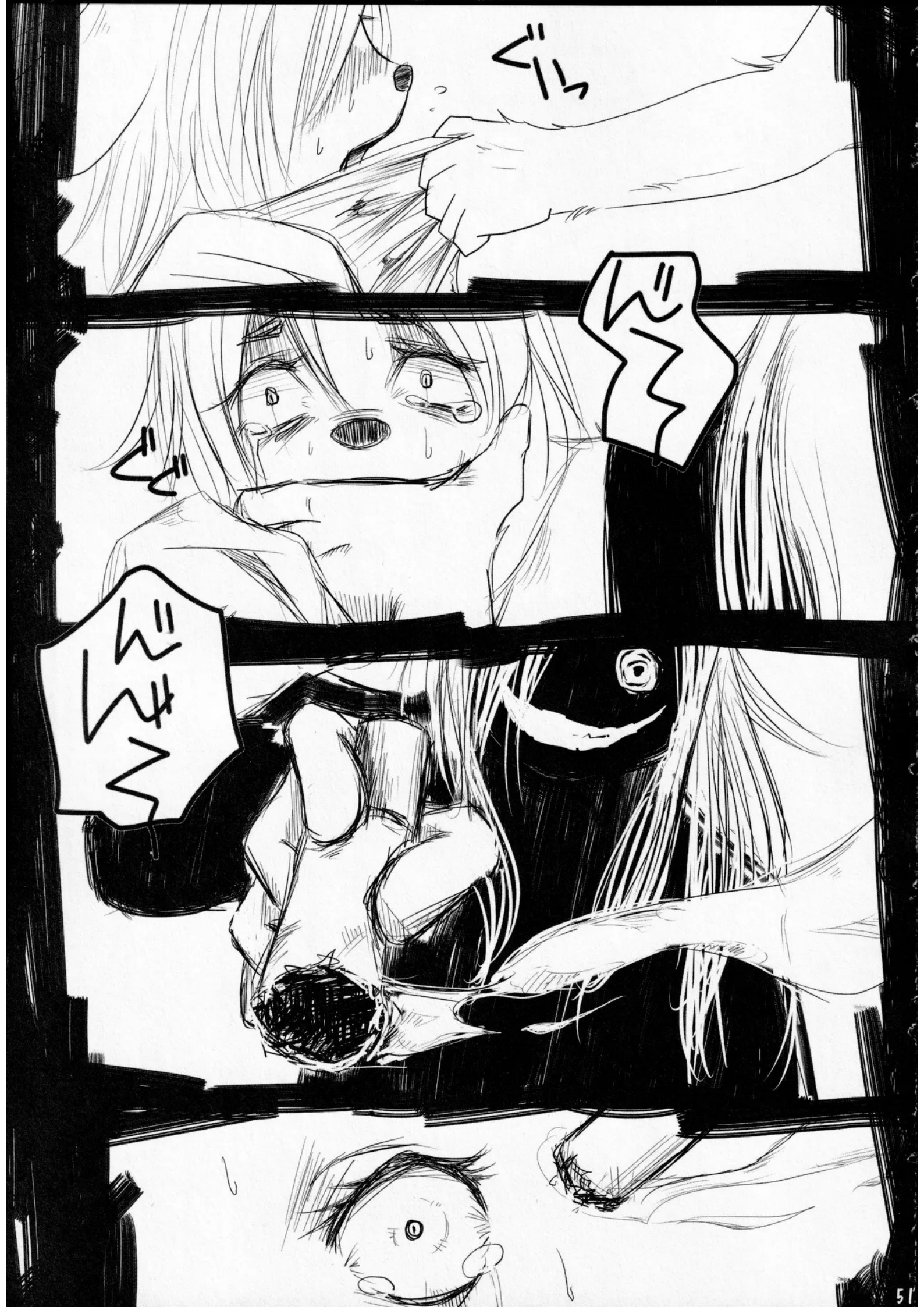
んん



うん...



ああ
そうだ



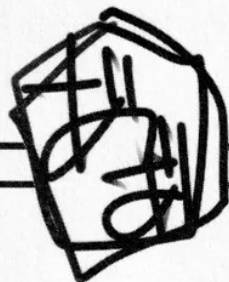
ムキムキ

ムキムキ

ムキムキ

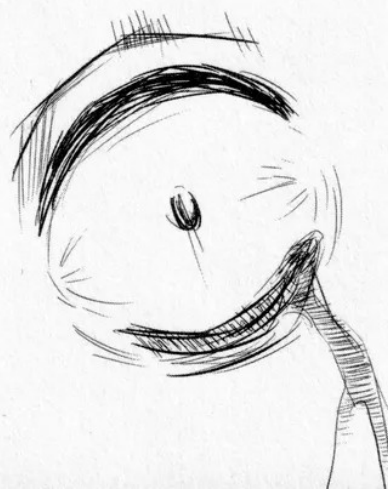
ムキムキ

ムキムキ



とろろで…

いつになったら
お前の言葉が
俺を止めるんだ？



ハウンド
司法府警察の名交渉官
ヨーキンザエル・ギルタ殿

お前の恋人死んじやうよ (笑)
くけやけやけやけやけやけやけやけやけ

声を嚔らし

咽喉を潰し

血反吐を吐き、

血涙を流す

あ

それでも…

お前の言葉は

俺の行為を

止めるに至らない

偉そうに語っていたじゃないか

力による正義の執行ではなく

何事も対話により平和的に

解決されるべきだと

どうした？

今まさに

必要だが

あ



対話を引き出す言葉が

俺を止める言葉が

お前の大切な人を守る言葉が

陳腐な

対話

素材に

なりえない

さあ

解決しないのか

やめろと叫ぶだけか

さあ

言葉

アを示して

言わないで後悔

言って後悔す

言葉で伝わらない

あるなんて言うなよ

言葉を使い尽くした者だけが

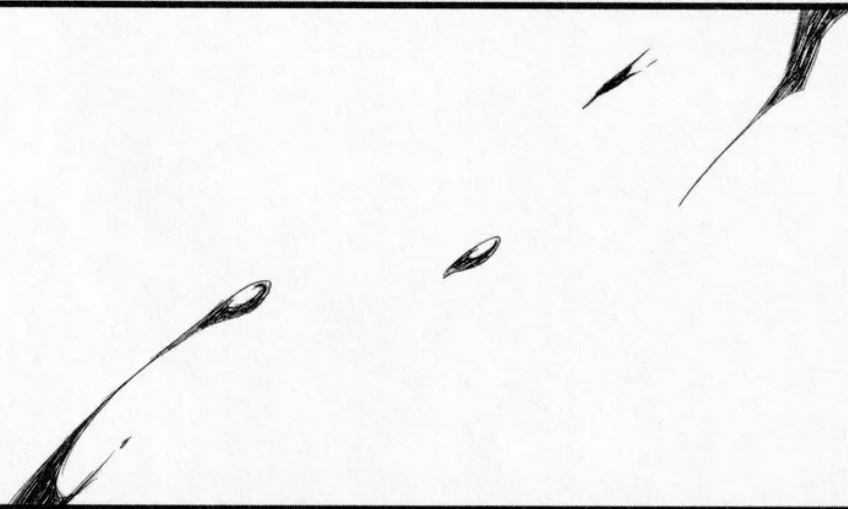
与える言葉

さあ

さあ



ア
マ
ン



ア
マ
ン

突入!!

被疑者の
死亡を確認

要救助者
2名確認
内1名は重傷



ヨーキンヴェル

交渉官

大丈夫

ですか?

あっ

ちよっと...

エンリツヒ!!



…あれ？

泣いてるの？

いつもはボクが泣いてて
ヨミくんがボクの涙を
拭ってくれるのに…ね

いやあ……

今日はボクが
ヨミくんの涙を
拭ってあげようかな

……えへへ





ああ...

でももう...
手... ないんだった



せっかくのチャンスなのに
残念...

三めんね…

END

■ 奥付 ■
美武里の本 5

2012年8月12日 (コミックマーケット82)

発行：美武里

発行者：美雅、和泉美和

Thanks!! やまねこ様、風雷雨シロ様

印刷・製本：緑陽社様

ご意見、ご感想等ございましたら下記までお願い致します。

URL <http://miburi.web.fc2.com/>

無断複写、複製、転載、データ化、共有はダメです。

当然、18歳未満の方の購入及び閲覧は禁止です。

presented by MIBURI

R18 for adult only

presented by MIBURI

R18 for adult only

presented by MIBURI

R18 for

美武里の本
presented by MIBURI

R18 for adult only

presented by MIBURI

R18 for adult only

MIBURI